

美術館ニュース

群馬の森

no. 178
2019 10/1

没後70年 森村西三とその時代

2019年9月21日[土] - 11月10日[日]

会場：展示室1

休館日：月曜日（9月23日、10月14日、28日、11月4日は開館）、
9月24日（火）、10月15日（火）、11月5日（火）

開館時間：午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）

観覧料：一般820（650）円、大高生410（320）円

*（ ）内は20名以上の団体割引料金

* 中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名、
群馬県民の日（10/28）に観覧される方は無料

森村西三は1897（明治30）年、群馬県伊勢崎市に生まれた鑄金工芸家です。1936（昭和11）年、高崎白衣大観音の原型を作った人としても知られています。1918（大正7）年、東京美術学校（現・東京藝術大学）に入学して鑄金を学び、在学中から花瓶や燭台を展覧会に出品して才能を開花させます。1927（昭和2）年、帝展に美術工芸部が新設されると、《鑄銅飾花瓶（燈）》（図1）を出品、街灯に集まるヤモリと人魂の戦いをイメージしたというユニークな作品で「構成派の新進作家」と評されました。その後の帝展には一貫して動物の香炉や置物を出品しています（図2）。鳥をモチーフとしたものが多いのは、自らの名前に由来するのでしょうか。

ほかにも、名門・森村家の後援により多くの名士の胸像の注文を受け、制作しましたが、ほとんどが戦時中に供出されています。1930（昭和5）年、県庁向かいの群馬会館に設置された四尺五寸（約137cm）の《新田義貞像》は、鎌倉幕府倒幕のため稲村ヶ崎まで進軍した義貞が、宝刀を海に投じて満潮を退かせたという場面を表現したものでしたが、これも供出されたと考えられます。また1937（昭和12）年から1940（昭和15）年にかけて、先の像をモデルに一尺（約30cm）あるいは三尺（約90cm）の《新田義貞像》を作って県内の小学校に次々と設置する動きがありました（図3）。戦況の激化に伴い軍国主義宣揚に利用される一面もありましたが、森村が図案化したのは決して馬上の甲冑武者ではなく祈りの姿をしています。戦後すぐに作られた『上毛かるた』では、GHQの検閲を経て類似のイメージが絵札に採用されました。

本展では、同時代に活躍した師や仲間の鑄金作品を展示するほか、森村の死後鑄金家の道を継いだ妻、寿々の作品なども展示します。



（図1）《鑄銅飾花瓶（燈）》
1927（昭和2）年 個人蔵



（図2）《ペリカン（銀香炉）》
1928（昭和3）年 個人蔵



（図3）《新田義貞像》
1938（昭和13）年
伊勢崎市立三郷小学校蔵

【関連事業】

[シンポジウム・講演会]

●シンポジウム：「高崎白衣大観音の謎に迫る」 9/29（日）
登壇者：手島仁（前橋学センター長・森村西三、寿々研究者）、塚越透（井上保三郎、房一郎研究者・元井上工業職員）、田口正美（群馬歴史散歩の会編集委員・元小学校長）、神尾玲子（当館学芸員）

●講演会：「鑄物師か？ 鑄金家か？」
—彫像作品制作をめぐって— 10/6（日）
講師：本橋浩介（佐倉市立美術館学芸員）

●講演会：「森村西三の生きた時代
—津田信夫と依頼制作— 10/14（月・祝）
講師：中松れい（千葉県立美術館学芸課長）
※各日とも14:00～15:30 当館2階講堂
申込不要・聴講無料（先着200名）

[学芸員による作品解説会]

10/23（水）、11/2（土） 各日 14:00～15:00 申込不要・要観覧料

戦争と美術 森村西三の失われた彫像

神尾玲子

彫刻の歴史を追いかけようとする、戦争という、ぽっかりと開いた穴に直面することがある。鑄金工芸家の森村西三の作品も、金属を素材としていたため、戦争中の供出と、戦後のGHQによる破壊命令の憂き目にあっている。さらに、作家自身が戦後まもなく病に倒れ、亡くなったために、自ら作品を再建させることが叶わなかった。

森村の故郷、伊勢崎市の華蔵寺公園内には、金属供出により主を無くした台座のみがひっそりと取り残されている（写真1）。小高い山の斜面を利用して作られた大きな滑り台のほど近くにあるのだが、時間が止まったまま現在に取り込まれたその風景は、戦争を知らない筆者にとって、まるで過去を覗き見るようで、戦争の爪痕をじわりと感じる。台座のプレートは削り取られ、背面には「大正十四年七月四日建立」と刻まれている。ここには1925（大正14）年、伊勢崎の教育者・板垣源次郎の胸像が設置された（写真2）。東京美術学校を卒業し、結婚して池袋にアトリエを構えた森村西三による彫像デビュー作であった。

1941（昭和16）年12月、太平洋戦争が始まると美術界も急速に戦時色を強めていった。帝展無鑑査となった森村は、戦時中であっても制作意欲が衰えることはなかった。1942（昭和17）年の新春に、次のような意気込みを語る手紙を支援者たちに送っている（伊勢崎・佐藤藤三郎氏旧蔵資料）。

この年頭にあたり、金属美術家中の有資格者、即ち帝文展二回以上入選、文展無鑑査、及び帝国芸術院会員にそれぞれ戦時必要欠く可らざる物資中、最も貴重なる金属の使用を許され、各々職域に精励することが出来るようになりましたことについて一言申し上げます。／昨秋、金属器具はその製造のみならず既に出来上っているものの販売すら禁止されたことは、新聞上等で周知のことと思います。つきましては、巷間にあふれている置物、花器類はその範囲内に入ります。これらはあたかも美術品の如き体裁をよそおっていても、大量に製造される商品に過ぎません物で、俗に「下り物」という単なる道具であります。これに反して、真の美術品につきましては、銅鉄回収中の条文にも、美術工芸品はその限りに非ずと特に明記して、その回収を除外されるばかりでなく、七七禁令による物価統制までも内務省令により、美術品に限りこれを解かれ、かつ製作販売等も自由であります。

前年までの帝展での活躍が評価され、無鑑査で官展に出品できるようになった、美術家としての自負が感じられる年賀状である。しかし、3年後の1944（昭和19）年、森村西三は郷里伊勢崎に疎開する。銅や鉄は統制となり、もはや制作活動ができなくなっていた。そして翌年3月の東京大空襲で自宅もアトリエも消失してしまうのであった。

終戦後間もなく志半ばで亡くなった森村の死後、元の像が供出された台座の上に、別の作者によって胸像が設置された例もある。高崎の観音山にある清水寺近くの広場に建てられた、森村西三による高崎市初代市長・矢島八郎像は、戦時中に供出され、現在は彫刻家・分部順治によって作られた矢島像が木立に守られて静かに立っている。



1



2

(写真1)
《板垣源次郎胸像》台座 華蔵寺公園（筆者撮影）

(写真2)
森村西三《板垣源次郎胸像》
『銅像写真集 偉人の俤』ゆまに書房より転写

友の会 秋のミュージアム・コンサート「森村西三へのオマージュ」

企画展覧会「没後70年 森村西三とその時代」にあわせて、森村西三の縁者にあたる森村恭一郎さんを中心に結成されたジャズカルテットが、森村作品やその時代への想いをジャズ演奏で贈ります！

日 時：10月26日（土） 14:00～15:00
会 場：当館エントランスホール
出 演：森村恭一郎ジャズカルテット

c o n c e r t



〔展示室 2〕

■日本と西洋の近代美術Ⅱ 9/14～12/16

当館の所蔵作品の中から、モネやルノワールなどの印象派から20世紀前半の西洋近代絵画、群馬ゆかりの作家や明治から昭和を代表する作家たちによる日本近代洋画ならびに彫刻を展示します。今回は、企画展に関連し森村西三とゆかりの深い作家の作品もあわせてご紹介します。(このコーナーは11/10まで)



佐伯祐三《パリ郊外風景》

〔展示室 3〕

■現代の美術Ⅲ 9/14～11/10

多彩な表現による20世紀後半以降の美術を紹介します。

〔展示室 4〕

■ルオー『ミセレーレ』全点展示 9/14～10/14

20世紀を代表する画家、ジョルジュ・ルオー(1871～1958)は、重厚な絵肌と色彩でキリストや道化師を描いた画家として著名ですが、版画においても多くの優れた作品を残しました。なかでも大型の版画集『ミセレーレ』(ラテン語の「憐れみたまえ」)は、ルオーが独自の着想から出発し、長い年月を経て仕上げた代表作のひとつです。人間の苦悩と罪深さ、また一方で、人間を原罪から救うために受難を被るイエスや、人と人々が愛し合う姿の中に「救い」を見出そうとする作者の思いがうかがえます。今回の展示では58点におよぶ全作品を一堂に展示します。

ジョルジュ・ルオー
《Iわれを憐れみたまえ、
おん身の大きい慈悲によって》

〔展示室 4〕

■新収蔵の版画 小川一衛、司修、坂爪厚生 10/16～12/16

近年、新たに収蔵した作品より、群馬にゆかりのある3人の作家の版画を初公開します。

坂爪厚生
《風景'74-我ら兄弟たちⅡ》

〔展示室 7〕 山種記念館

■磯部草丘の世界 1 9/14～10/14

■磯部草丘の世界 2 10/16～11/10

秋の展示室7は、企画展覧会「森村西三とその時代」との関連企画として、森村西三と親交のあった磯部草丘の作品を2期にわけて展示します。



磯部草丘《花鳥図屏風》(1期)



磯部草丘《秋立つ浦》(右隻) (2期)

M u s e u m | N e w s

コレクション展示ピックアップ

森村西三をめぐる ―― 横堀角次郎と田中佐一郎

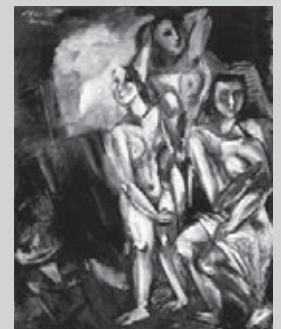
ここでは、コレクション展示で見られる二人の洋画家と森村西三との縁について見てみましょう。

横堀角次郎(1897～1978)は森村と同じく、旧制前橋中学校に学びました。森村が1910(明治43)年、横堀は1911(明治44)年に入学し、森村が腸チフスで休学して1学年遅れ、結果、二人は同級となりました。森村は校長排斥運動に加わったことで退学処分となり、横堀は東京の学校に転校し、その後別々の道を進んだにも関わらず、鋳金家に画家と、双方が芸術に携わるようになったことに、不思議な運命のようなものを感じます。やがて二人は群馬美術協会や三西会で共に活動することになります。

一方、田中佐一郎(1900～1967)は森村と意外なつながりをもつこととなりました。1954(昭和29)年に妻・園子を病で亡くした田中は、森村の死後、鋳金家として活躍していた森村の妻・寿々を知り、二人が住んでいた豊島区の美術協会等で親交を深め、翌年に結婚します。二人を引き合わせたのは横堀とも、田中と同じ独立美術協会でも活動した中村節也とも言われ、そして仲人は横堀が務めました。奇しくも二度、芸術家の妻となった寿々は、二人の夫の作品を当館に寄贈してくださっています。



横堀角次郎《田植えもすみて》



田中佐一郎《裸婦三像》

題 名の通り、南房総の海を見下ろす高台にある閑静な住まいとその裏庭の風景を、緻密な線と柔らかな色彩で俯瞰するように描く。遠景には、連なる山々や浜辺に引きあげられた漁舟、そして鶉に似た鳥が群れ飛ぶ海が広がる。近景には三角屋根の洋風な建物があり、レースのカーテンがかかる窓や、縁先から開いた障子越しに室内が伺える。ガラス屋根のテラスには、赤い花の鉢植えがのった籐のテーブルやガーデンチェア、本棚があり、その先に続く庭には、池のほとりにオウムがいる鳥籠が置かれ、様々な花が咲き乱れる温室や鶏小屋がある。蘇鉄や棕櫚、八手が植えられ、枇杷の花が咲き、蜜柑が実をつけている。さらに椿や紅白の梅の花も見え、季節はおそらく冬から初春であろう。人の気配を残すも姿は描かれず、華やかながら静けさが漂う。うねるような枝振りの木々に囲まれ、ひっそりと佇む住まいをそっと覗き見る感覚はまるで秘密の花園のようで、幻想的な世界に観者を誘う。

磯部草丘(1897-1967)は明治30(1897)年、群馬県佐波郡宮村宮古(現・伊勢崎市宮古町)に生まれた。旧制の群馬県立前橋中学校(現・群馬県立前橋高等学校)を卒業し、入隊や代用教員として勤めるも、大正8(1919)年、22歳で上京して川合玉堂(1873-1957)に入門。大正13(1924)年には第5回帝展に初入選する。一時、体を壊して館山で療養するが、その生活は草丘に大きな影響を与え、特に海景は生涯にわたり主要な画題となった。草丘にとって昭和初期は、新たな表現を求めて精力的に活動し多くの大作を残した時期で、第11回帝展に出品した本作品もその一つである。以降は色面に意識が向き、鮮やかな色彩と装飾的な造形、そして躍動感ある画面へと画風を展開させていく。

*企画展「没後70年 森村西三とその時代」開催に関連して、森村西三と前橋中学校の同期で交友があった磯部草丘の作品を展示室7(山種記念館)で展示します。

「磯部草丘の世界1」 9月14日[土]～10月14日[月・祝]

「磯部草丘の世界2」 10月16日[水]～11月10日[日]

本作品は1期に展示予定です。なお、1期と2期では展示作品が変わります。この機会にぜひご覧ください。



磯部草丘《房南閑居》昭和5(1930)年
絹本着色・額装 255.0×131.9cm

2020年2月8日[土] - 3月22日[日]

会場: 展示室1

休館日: 月曜日(2月24日は開館)、2月25日(火)

観覧料: 一般820(650)円、大高生410(320)円

*()内は20名以上の団体割引料金

*中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は無料

田 園や森に戯れる神々や半神たちが恋や冒険を繰り広げるギリシャ・ローマ神話は、時代を経るごとに多様な解釈や創作が加えられ、豊かな広がりを見せてきました。本展覧会では、18世紀の版画家ピラネージからポール・デルヴォーなど20世紀までの作家をとりあげ、近代美術が表現した神話や古代の情景をご紹介します。国内所蔵の絵画、版画、彫刻等約60点にイギリス、リヴァプール国立美術館所蔵の19世紀ロイヤル・アカデミーの作家たち、フレデリック・レイトンとローレンス・アルマ=タデマの絵画2点を加え、甘美な古典の世界をお楽しみいただきます。特にレイトン《月桂冠を編む》は日本初公開となります。



フレデリック・レイトン《月桂冠を編む》1872年
油絵・カンヴァス 63.7×59.9cm
リヴァプール国立美術館 ウォーカー・アート・ギャラリー
© Courtesy National Museums Liverpool, Walker Art Gallery.

